

## 明治学院留学生たちの 2・8独立宣言と3・1独立運動

佐藤飛文

### 1. はじめに

1919年3月1日にソウル、平壤などで同時に始まった「独立万歳」を叫ぶデモは、約3ヶ月にわたり、全土で1542回おこなわれ、人口の約1割にあたる200万人が参加したと言われている。<sup>(1)</sup> この3・1独立運動には明治学院で学んでいた朝鮮人留学生たちや卒業生たちも多く参加した。中には3・1独立運動の導火線となった2・8独立宣言を起草した李光洙や、東京での留学生独立運動のまとめ役をつとめていた白南薫、ソウルで「哀願書」を書いて逮捕された文一平、大韓民国臨時政府に加わった朱耀翰など、重要な役割を果たした人物もいる。100年前に始まったこの独立運動に明治学院の関係者がどのように参加し、どのような役割を果たしたのかを検証したい。

### 2. 李光洙と2・8独立宣言

第1次世界大戦中の1918年1月にアメリカ合衆国大統領ウッドロウ・ウィルソンが提唱した14か条の平和原則の中の「民族自決の原則」は、植民地の人々に大きな希望を与え、独立運動が盛り上がる契機となった。

1918年12月15日付の英字新聞『ジャパン・アドバタイザー』に掲載された「米国在住の韓国人達たちが独立を主張」といった記事に触発されて、独立運動への機運が日本にいた朝鮮人留学生の間で高まっていた<sup>(2)</sup>。

1918年12月29日、神田猿樂町の明治会館で開かれた朝鮮留学生学生会の忘年会と、翌30日に神田西小川町の在日本朝鮮基督教青年会館で開かれた東西連合雄弁大会で、民族自決論による独立運動の提案が出された。1919年1月6日には在日本朝鮮基督教青年会館で新年雄弁大会が開かれ、具体的な運動計画を立てることになった。その結果、崔八鏞（早稲田）、白寛洙（正則英語学校）、金度演（慶應義塾）、李琮根（東洋）、宋繼白（早稲田）、崔謹愚（東京高等商業学校）、徐椿（東京高等師範学校）、尹昌錫（青山学院）、金尚徳、田榮澤（青山学院）の10名が実行委員に選出された。のちに田榮澤は病で辞退し、李光洙（早稲田）と金喆寿（慶應義塾）が補任されて、朝鮮青年独立団が組織された。<sup>(3)</sup>

朝鮮青年独立団は独立宣言書と決議文、民族大会召集請願書を起草することにした。起草者に選ばれたのが李光洙であった。

1910年に明治学院普通学部を卒業した李光洙は、独立運動家でキリスト者の李昇勳が平安北道定州に設立した五山学校の教員となったが、1915年に再渡日して、早稲田大学で哲学を学んでいた。1917年には朝鮮近代文学最初の長編小説「無情」を『毎日申報』に発表している。さらに朝鮮青年独立団に加わり、独立宣言書と決議文、民族大会召集請願書を起草することとなった。

李光洙が起草した独立宣言書の冒頭には、「全朝鮮青年独立団はわが二千万の朝鮮民族を代表し、正義と自由の勝利を得た世界万国の前にわが独立を期成せんことを宣言する。」とその決意が述べられている。そして日本が日清・日露戦争後「東洋平和と韓国の独立を保全する」という約束を破って大韓帝国の外交権を奪い保護国化し、さらに司法権と警

察権を奪い、軍隊を解散させ、秘密と武力とをもって併合条約を締結したことは「詐欺と暴力から出たもの」だと非難している。また併合後は朝鮮人の「参政権、集会結社の自由、言論出版の自由を許さず、甚だしくは信教の自由、企業の自由に至るまでも少なからず拘束している」と指摘し、民族差別や教育差別、雇用差別といった差別の実態を例示し、日本の「武断専制、不正不平等の政治」を告発し、「生存の権利のために独立」することを主張している。また、世界改造の主人公であり、日本による朝鮮の「保護」と「合併」を率先して承認したアメリカとイギリスはその罪を償う義務があるとも指摘している。そしてロシアと中国が軍事的野心を放棄して新国家の建設に従事していること、国際連盟が実現すれば再び軍国主義的侵略を敢行する強国はなくなるであろうことを予測し、韓国併合の理由はすでに消滅していると主張している。そのような世界情勢の変化の中で、「正義と自由を基礎とした民主主義の上に、先進国の範に従って新国家を建設した後は、建国以来文化と正義と平和を愛護してきたわが民族は、必ずや世界の平和と人類の文化に対し貢献することであろう。」と平和主義・国際主義を宣明し、「ここにわが民族は日本および世界各国が、わが民族に民族自決の機会を与えることを要求する。もしそうならなければ、わが民族はその生存のために自由行動をとり、わが民族の独立を期成することをここに宣言する。」と結んでいる。<sup>(4)</sup>

さらに決議文では、①朝鮮民族の独立の承認、②朝鮮民族大会の召集、③パリ万国平和会議における民族自決主義を朝鮮民族にも適用することを要求し、これらの要求が受け入れられなかった時は「わが民族は日本に対し永遠の血戦を宣言する。」と決意表明している。<sup>(5)</sup>

崔南善は東京からソウルへ秘密裏に持ち込まれた2・8独立宣言書を読んだことをきっかけに、3・1独立宣言書の起草を決断したと言われている。<sup>(6)</sup> 確かに2つの独立宣言文は構成が似かよっており、3・1独

立宣言が2・8独立宣言の影響を受けていることがわかる。しかし2・8独立宣言書に明記されている「民族自決」という文言が、3・1独立宣言書には見あたらない。「日本に対し永遠の血戦を宣言する」と最後まで抵抗を貫こうとしている2・8独立宣言に対して、3・1独立宣言は「日本の不義を責めようとするものではない」「旧怨と一時的感情によって他を嫉逐排斥するものではない」と無抵抗を貫こうとしている。李光洙は力と知識を得て植民地朝鮮の近代化と独立を「私たちがするのです！」<sup>(7)</sup>と小説『無情』に書き、その情熱で独立宣言文を書いた。それに対し崔南善は「兎に角感情に走らぬ事」を重視しながら独立宣言文を起草し、「学者を貫きたい」という口実で自身が起草した独立宣言への署名を拒み、逮捕後の訊問では「そもそも独立運動には反対だった」「民族自決は理想にすぎない」とまで語っていた。<sup>(8)</sup>起草者の性格の違いが独立宣言文の違いを生んだとも考えられるだろうし、大正デモクラシー下の東京と武断統治下のソウルという起草地の環境の違い、平均年齢26歳の2・8独立宣言署名者と平均年齢48歳の3・1独立宣言署名者という世代の違いも指摘することができるだろう。姜徳相氏は「両者を比較してみると、文脈の構成において相似性をもちながらも二・八宣言の方が独立宣言の思想性や説得性ははるかに高いものがある。」と評価している。<sup>(9)</sup>

朝鮮語で書かれた独立宣言書は李光洙自身の手で日本語訳と英訳がなされた。独立宣言書を英訳する際、李光洙は東京に一時滞在中であったジョージ・シャノン・マッキューン（朝鮮名は尹山温）に添削を依頼した。アメリカ北長老会宣教師として朝鮮に渡り、当時平安北道の宣川にある信聖学校の校長をしていたマッキューンは、1935年に神社参拝強要を拒否したため、朝鮮総督府によって国外追放されたことでも知られている。しかしこの時マッキューンは、「李先生、私はこの文章を読まない方がよさそうです。私は今朝鮮へ帰る途上ですから」と独立宣言書

## 明治学院留学生たちの2・8独立宣言と3・1独立運動

の添削を断り、代わりに近く米国へ帰国予定であったランディス博士を紹介した。ヘンリー・モア・ランディス博士は明治学院の宣教師であり、李光洙もかつてランディスから英語を習っていた。そこで李光洙は9年ぶりに母校である明治学院を訪れ、中学時代の恩師であるランディスに再会し、英文の独立宣言書の添削を依頼した。ランディスは快く添削を受け、「愛国運動には成功も失敗もないものですよ」と励ましたという。<sup>(10)</sup> 2・8独立宣言の英訳作業が白金の明治学院キャンパスの宣教師館でおこなわれたということは、特筆すべき出来事である。

### <資料1>ランディスと李光洙と文一平



この写真は1909年に明治学院で撮影されたもの。前から2列目の左から3番目がランディス、前から3列目の右から3番目が李光洙（当時、明治学院普通学部5年生）、左から2番目が文一平（当時、明治学院普通学部5年生）である。

2・8独立宣言の発表は、本国や中国の独立運動家との綿密な連絡のもとに秘密裏に進められた。上海では1918年8月に呂運亨、張徳秀、金澈、趙東祐、鮮于懔らが新韓青年党を結成し、11月に金奎植や李光

洙も党に加わり、パリ講和会議に代表を派遣する計画を練り始めた。<sup>(11)</sup> 1918年11月の新韓青年党の北京会議に参加した李光洙は、日本へ渡る前にソウルに立ち寄って玄相允と面会し、崔麟や孫秉熙ら天道教を主体とした独立運動を起こす計画を相談した。また朝鮮青年独立団は李光洙が起草した独立宣言書と決議文を絹布に書き写し、制服の裏地に縫い付けて宋継白を朝鮮に送った。<sup>(12)</sup> 宋継白は独立宣言書を印刷するためのハンゲルの活字を買い求めた後、ソウルの中央学校の玄相允を訪ね、東京の留学生たちが独立運動を進めている様子を伝え、独立宣言文を見せた。さらに宋継白は天道教<sup>(13)</sup>の幹部である崔麟(普成高等普通学校校長)や、のちに3・1独立宣言書を起草する崔南善らとも面会した。宋継白の情報を崔麟から聞いた天道教の教主・孫秉熙は、キリスト教界の李昇薫や仏教界の韓龍雲らに独立運動を働きかけ、それが3・1独立運動へつながって行った。また、宋継白はソウルで鄭魯湜とも面会し、日本での独立運動のための資金援助を受けた。<sup>(14)</sup>

2・8独立宣言書と決議文は、白寛洙が在日本朝鮮基督教青年会の謄写版を白南薫から秘密裏に借りて、豊多摩郡戸塚町(現在の新宿区)に下宿していた留学生金熙述(正則英語学校)の部屋で刷った。民族大会請願書は崔八鏞が芝区小山町にあった伊藤印刷所に印刷を依頼した。<sup>(15)</sup>

1919年2月8日、午前中に日本語と英語に訳された独立宣言文と決議文、民族大会召集請願書を日本の貴族院、衆議院の議員たち、朝鮮総督府、政府要人、各国駐日大使、内外言論機関宛てに郵送した。この日の午後から、朝鮮人留学生学友会総会が在日本朝鮮基督教青年会の講堂で開催された。総会は崔八鏞の「朝鮮青年独立団を発足させよう」という緊急動議で独立宣言大会に切り替わり、白寛洙が「2・8独立宣言書」を朗読した。金度演が決議文を読み上げようとした時に警官たちが乱入して会は強制的に解散させられ、その日のうちに宣言書に署名した9名を含む27名が逮捕された。<sup>(16)</sup>

ところが、逮捕された指導者たちの中に、李光洙の姿はなかった。李光洙は1月31日に神戸から船に乗り、2月5日に上海に渡っていた。<sup>(17)</sup> 東京での独立運動が弾圧され黙殺されてしまう可能性があったため、李光洙は独立宣言の発表前に中国に渡って自分たちの独立の意志を世界に伝えてほしいと委託され、亡命したのであった。李光洙は託された資金を使って上海からアメリカ合衆国大統領ウィルソン、英国首相ロイド・ジョージ、フランス首相クレマンソーら列国代表に独立宣言文を打電した。さらに李光洙は、英文の独立宣言書をアメリカ系英字新聞『チャイナ・プレス』とイギリス系英字新聞『ノースチャイナ・デリー・ニュース』に持ち込んで掲載を依頼した。両紙は2・8独立運動に関する記事を掲載し、東京の朝鮮人留学生たちの独立運動を世界に伝えるという目的が達成された。<sup>(18)</sup>

上海では新韓青年党が金奎植をパリ講和会議に派遣すると同時に、呂運亨をロシアへ、張徳秀を日本へ派遣、金澈、鮮于懋らが朝鮮に帰国して独立運動を働きかけることなどを決定していた。<sup>(19)</sup> 李光洙は新韓青年党に再び合流して、法租界霞飛路の党事務所を拠点に趙東祐や呂運弘らと共に朝鮮本国の3・1独立運動の動きについても上海から世界に発信した。そして李承晩・呂運亨・金九・安昌浩・朱耀翰らと共に大韓民国臨時政府の樹立に参加し、機関紙『独立』（のちの『独立新聞』）の編集局長、社長をつとめた。1920年3月1日には朴殷植と李光洙が主筆となって『新韓青年』創刊号が発行されるが、創刊号には中国語に訳された『在日本東京青年独立団之宣言書』が掲載されている。<sup>(20)</sup> 李光洙が朝鮮語から日本語と英語に翻訳して東京から上海に持ち込んだ2・8独立宣言は、上海で（そして、おそらく李光洙自身の手によって）中国語にも翻訳されて発表されたのである。



基督教青年会の講堂で開催された。独立宣言集会は治安警察法により解散命令が出され、指導者たちは拘束され西神田警察署へ連行された。白南薫は差し入れをしながら逮捕者の支援募金を呼びかけた。そして逮捕・起訴された朝鮮青年独立団の代表9名のために、弁護士探しをはじめた。白南薫の自伝によると、最初はYMCAの理事でもあった新渡戸稲造に斡旋を依頼しようとしたのだが、面会を断られてしまう。そこで東京帝国大学学生青年会幹事の藤田進男氏に相談し、今井嘉幸、作間耕造の両氏を紹介してもらい弁護を引き受けてもらうことができた。今井嘉幸は衆議院議員であり普選運動家としても知られている人物である。さらに白南薫は花井卓蔵と鶴澤總明にも弁護を請い快諾を得た。<sup>(22)</sup> 花井卓蔵は衆議院副議長もつとめた政治家であると同時に、足尾銅山鉍毒事件や大逆事件、日比谷焼き打ち事件や米騒動などの弁護を担当した人権派弁護士であり、韓国併合期の寺内総督暗殺未遂容疑で起訴された新民会105人事件の弁護団や、3・1独立運動で起訴された民族代表ら47名の弁護団にも加わっている。鶴澤總明も花井卓蔵と共に105人事件や大逆事件の弁護をしたクリスチャン弁護士であり、衆議院議員から貴族院議員、大東文化学院総長、明治大学の総長なども歴任した法曹界の重鎮である。この弁護団に控訴審から加わったのが布施辰治である。<sup>(23)</sup> 布施辰治は労働争議や廃娼運動、普選運動などに積極的に関わった社会運動家であり、二重橋爆弾事件、朴烈事件、朝鮮共産党事件など朝鮮人が被告となった事件の弁護を積極的に引き受け、2004年には韓国政府から建国勲章愛族章が授与されている。無報酬で弁護を引き受けた5名の弁護団は、厳しい内乱罪を適用しようとした検事の論告を論駁し、結局出版法違反で6名が禁錮9ヶ月、3名が禁錮7ヶ月となった。

市ヶ谷の東京監獄に収監された9名の面会と差し入れを担当したのも白南薫であった。何度も通ううちに看守とも面識ができ、1909年12月

25日のクリスマスには祈祷会を開くことを野口典獄に要請し、「祈祷は日本語でおこない他の言語では話さないこと。看守部長1人を同席させること」という条件付きで教誨室での祈祷会を開くこともできた。白南薫と9名は、涙を流しながら日本語で祈祷したという。1920年3月9日の出獄の日まで、白南薫は東京監獄へ通い続けた。<sup>(24)</sup>

#### 4. 文一平の哀願書

2・8独立宣言が導火線となり3・1独立運動がはじまってから、各地で独立万歳をさげぶ示威運動が起き、新たな独立宣言書も作られていった。1919年3月12日にソウルで発表された「哀願書」を起草したのが文一平であった。

文一平は1910年に明治学院普通学部を卒業後、帰国して平壤の大成学校の教師となり、その後義州の養實学校、ソウルの徹新学校でも教えるが、1911年に再渡日して早稲田大学予科に入学し、翌年政治学部に進学。1912年に大学を中退し、上海に渡って大共和報社に勤め、1914年に帰国した。明治学院では李光洙と親しく付き合い、徹新学校では金奎植や崔南善とも密接な関係を持ち、早稲田では安在鴻、金性洙と知り合い、上海では歴史家の朴殷植や申采浩らとも出会う中で、民族啓蒙運動に力を注ぐようになっていった。

3・1独立運動がはじまって一週間後の3月8日、文一平はソウル安国洞にある長老派教会の金百源牧師を訪問した。この時文一平は「33人が独立宣言を発表して勾禁されている。自分たちも2千万余の代表になりたい」と語ったという。<sup>(25)</sup> 2人は良心の命ずる所に従って33名の民族代表のした事に付き従って行くために行動をとることを話し合い、哀願書の文案を文一平が作成することになった。そこで文一平は3月11日に哀願書を2通作成した。

3月12日、ソウル瑞麟洞にある永興館という料理店に金百源・文一平・金極善・趙衡均・白觀亨・車相晋・文成鎬の7名が集まり、「朝鮮13箇道代表者会議」を開いた。その会議で2通の哀願書のうち1通は朝鮮総督に提出し、1通は鍾路普信閣で朗読発表しようと決め、車相晋と文成鎬は朝鮮総督に提出、金百源・文一平・金極善・趙衡均・白觀亨は鍾路十字街にある普信閣前に行き群衆数百人の前で朗読しはじめたが、1枚ばかり読むとすぐ取り押さえられてしまう。<sup>(26)</sup>

文一平は京城地方法院での訊問で、「講和会議に於て唱えられて居った民族自決主義を新聞紙上で知りたる時其の主義により独立仕様とは思わなかったか」という問いに対して、「日時は記憶して居りませぬが雑誌『太陽』を見て講和会議に於て民族自決主義が唱えられていることを知り又其の会議の結果国際連盟が成立すれば武力では国が立たなくなります。それで民族自決主義が朝鮮にも適用するとすれば朝鮮も独立出来るものと思いました。」と答えている。また、「どうして独立すればよいと思いたるや」という問いには「自由の国民に為りたいからであります。」と答え、「朝鮮総督政治では自由が出来ぬのか」という問いに対しては、「左様。教育、出版、言論等につき自由ありませぬからそれで独立を希望するのであります。」と答えている。<sup>(27)</sup> 文一平は保安法違反で起訴され、懲役8ヶ月となった。

1995年、文一平の独立運動家としての功労が認定され、建国勲章独立賞が追叙された。2003年5月には国家報勲処が選定する「今月の独立運動家」に選ばれ、2005年6月には独立記念館に彼の語録碑が建立された。<sup>(28)</sup>

### <資料3> 独立記念館の文一平語録碑



(日本語訳) 湖巖 文一平 先生  
(1888 ~ 1939) 独立運動家 民族史学者  
朝鮮独立は民族が要求する  
正しい道として 大勢必然の  
公理であり 鉄則である  
哀願書中より

## 5. 黄海道での独立運動と金洛泳

3・1 独立運動は地方にも広がって行った。朝鮮半島北部の黄海道では示威運動が167回起こり、のべ63,620人が参加したという。<sup>(29)</sup>

3月1日には黄海道の黄州, 沙里院, 延白, 遂安, 瓮津郡で独立宣言書の配布が発覚, 3月2日には黄州, 鳳山, 延白, 遂安, 谷山, 海州, 載寧, 安岳, 信川, 殷栗, 松禾, 長淵, 金川の13郡の30数か所で示威運動が起きた。<sup>(30)</sup>

その後も黄海道内の各地で運動は続いた。3月12日には黄海道長連

郡でキリスト教徒を中心とした群衆約3000名が独立宣言書を配布しながら示威運動をおこない、同日黄海道松禾郡では天道教徒を中心とする200名の群衆が憲兵隊と衝突して重軽傷者が出た。<sup>(31)</sup>

黄海道長淵郡では、3月11日に天道教徒50名と群衆約200名が警察署前で示威運動を起こし、3月16日には300余名が示威運動をおこない、4月11日、4月16日にも示威運動が起きた。

4月18日、黄海道長淵郡大救面の松川里でも万歳運動が起きた。この運動の中心となったのは松川教会のキリスト者たちであった。ちょうど松川で市が開かれる4月18日に、約80名の青年たちが「大韓独立万歳」の喊声をあげて先導し、買い物に来ていた人々がこれに加わって数百名にふくれあがった隊列が太極旗を振り独立宣言書を配りながら道を行進して行った。駐在所の巡查と憲兵達が出動しデモ隊は解散させられ、主導者たちは逮捕された。この運動を主導したキリスト者の一人が金洛泳であった。<sup>(32)</sup>

1884年に黄海道松禾郡で生まれた金洛泳は、1899年に洗礼を受けキリスト者となり、執事・長老として奉仕。1908年に明治学院普通学部に入ると、朝鮮西北地方の出身者を中心に設立された留学生団体である太極学会の会長となり、さらに朝鮮人留学生団体の全体統合組織である大韓興学会の書記員などもつとめた。1909年に一時帰国した際は、李光洙とともに安岳勉学会の夏季師範講習所で講義をおこなっている<sup>(33)</sup>。1910年3月に明治学院普通学部を卒業後、黄海道松禾郡に戻った金洛泳は、独立運動家の盧伯麟が設立した光武学校の教師をつとめた<sup>(34)</sup>が、光武学校が廃校になると再渡日して早稲田大学で学び、1915年からは黄海道の豊川公立普通学校の副訓導として勤務していた。

金洛泳は1919年4月18日に松川での3・1独立運動を主導して逮捕され、懲役1年となった。1920年には在日本東京朝鮮基督教青年会の副幹事として再来日。1923年の関東大震災時には臨時在京留学生会の

調査委員となって朝鮮人留学生たちの救援活動にあたった。

## 6. 金東仁の2・8独立宣言と3・1独立運動

東京での2・8独立宣言集会への参加を望みながらも参加することができなかった人物が金東仁であった。彼の自伝によると、2月8日の早朝に若松警察署の刑事に呼び出されてしまったのだ。実家から金東仁宛てに送金された200円が朝鮮独立運動に使われているのではないかという嫌疑であった。金東仁はその頃、朱耀翰や田榮澤、崔承萬らと共に同人誌『創造』の編集に奔走していて、実家から送られた200円はその創刊号の印刷・製本の費用に使ったことを説明し、疑いが晴れて釈放された。<sup>(35)</sup>

2月8日に逮捕を免れた朝鮮人留学生たちは、2月11日に100名ほどが日比谷公園に集まり、あらたに李達を会長に選出し、独立についての演説と万歳を叫んだが、李達以下13名が検束され解散した。<sup>(36)</sup> 2月24日には民族大会召集促進大会が日比谷公園で開かれ、約150名が集まった。崔在宇が「朝鮮青年独立団民族大会召集促進部趣意書」を朗読し、趣意書を配り始めたところで解散命令が出され、16名が警察署に連行された。16名のうち14名は説諭後に釈放されたが、2名が検束された。検束された2名は崔在宇と金東仁であった。<sup>(37)</sup> この事件が報道され、心配した家族が金東仁に「ハハキトクスグカヘレ」という電報を送り、金東仁は平壤へ帰郷することにした。<sup>(38)</sup> 3月1日に東京を発ち、憲兵警察の厳重な警戒下の釜山に上陸し、ソウルで3・1独立運動の消息を聞いて、「ああ、民族は生きていたのだな！寺内の銃口でも民族の魂は殺すことが出来なかったのだな！」と歓喜の涙を流したという。<sup>(39)</sup> 平壤に帰郷後、金東仁は3・1独立運動の檄文を書いて出版法違反で再逮捕され、平壤監獄に3ヶ月間投獄された。

このときの投獄経験をもとに書いた作品が「笞刑」である。「笞刑」は、3・1独立運動から3年後の1922年12月から1923年1月にかけて月刊誌『東明』に連載された短編小説である。監獄での過酷な生活が異常な心理に陥らせてゆくさまを描写している。

「彼らはなんでここにきたのか。風が吹き、寝床があり、たばこのある娑婆から何をしにここにきたのだろう。可愛い孫のいる人もいるだろう。可愛い妻のいる人もいるだろう。自分が稼がなければ飢え死する母親のいる人もいるだろう。彼らは自由に食べ、飲み、風にあたり、自由に寝ていたにちがいない。そんな彼らがなにを求めてここにやってきたのか。

しかし今の彼らの頭には独立もなく、民族自決もなく、自由もなく、いとしい妻子も父母も、あるいは暑さを感じる神経さえもない。重い空気と暑さに苦しみさいなまれ、頭蓋骨のなかに小さくちぢこまった彼らの疲労困憊した脳に、たったひとつの願いがあるとすれば、それは一口の冷水だった。」<sup>(40)</sup>

平壤の大地主で、長老派教会の長老である金大潤の次男として生まれた金東仁は、1912年に崇徳小学校を卒業後、1914年に渡日し、1915年に明治学院中学部2年に編入した。1919年に朝鮮最初の純文学の同人誌『創造』を東京で発刊するが、同雑誌の創刊号から第2号に発表した初短編小説「弱き者の悲しみ」は、朝鮮最初の自然主義作品として知られている。主な代表作は「いも」「足の指が似ている」「明文」「赤い山」「狂炎ソナタ」などがある。

## 7. 朱耀翰の上海亡命

金東仁と共に『創造』を創刊したのが朱耀翰であった。朱耀翰は1912年に在東京朝鮮人留学生宣教師だった父親の朱孔三について渡

日し、1913年に明治学院中学部に入学。明治学院在学中に文学に関心をもち、『伴奏』『現代詩歌』『白金学報』らに日本語の詩を発表する一方、川路柳虹の門下で近代詩を学んだ。1918年に明治学院中等部卒業後、東京第一高等学校へ進学した。1919年2月、金東仁らと共に『創造』を発刊。その創刊号に発表した詩「火祭り（観燈会）」は、朝鮮で最初の自由詩であり浪漫詩であると言われている。

3・1独立運動が始まると、『創造』第2号に「私は行く。どこへ行くかはわからない。しかし、どこへか、私は行くだろう。」と書いて平壤に帰省。その頃、弟の朱煥燮が「無窮花少年会」を組織して謄写版で作ったビラを配って逮捕されてしまう。「せめておまえ一人だけでも、まともにも勉強をつづける」と父から諭されて東京に戻ったものの、勉強は全く手につかなかったという。在日本朝鮮基督教青年会館で「上海で大韓民国臨時政府が樹立された」という『新韓日報』の記事を読み、上海への亡命を決意した。<sup>(41)</sup>

朱耀翰が長崎から上海に着いたのは5月の中旬、ヴェルサイユ条約調印に反対する5・4運動が北京から中国全土に広がり、日本製品ボイコット運動も広がりつつあった。

1919年6月に大韓民国臨時政府の内務総長に安昌浩が着任し、8月に臨時政府の機関紙『独立』（のちの『独立新聞』）を発行することになり、李光洙が社長兼主筆、朱耀翰が出版部長をつとめ、約1年間、朝鮮の独立を訴え続けた。

## 8. 3・1独立運動後

3・1独立運動に手痛い打撃を受けた日本は、朝鮮の支配政策を武断政治から文治政治に変更した。言論、出版、集会の自由が一部容認されるようになり、1920年には『東亜日報』『朝鮮日報』など朝鮮語の民間

新聞の創刊が許可された。1921年に上海から帰国した李光洙は、東亜日報社に入社し、編集局長、編集顧問、取締役などを歴任しながら、「民族的経綸」などの論説を掲載し、民族の実力養成を説いた。また朱耀翰も1925年に東亜日報社に入社し、学芸部長、平壤支局長、編集局長、論説班記者などをつとめた。東亜日報には初代社長となった朴泳孝や、金瓚永、劉泰魯、丁來東、金鴻亮など、多くの明治学院出身者が活躍した。一方、朝鮮日報は、1932年に朱耀翰が東亜日報から移籍して編集局長兼取締役就任すると、金東仁が学芸部長として入社、1933年には文一平が朝鮮日報の編集顧問に加わり、李光洙も朝鮮日報の副社長に就任した。両紙はしばしば発行停止処分を受け、1940年に強制廃刊となったが、解放後に復刊し、現在に至っている。

3・1独立運動後に教育者として活躍した明治学院卒業生もいる。白南薫は1923年に帰国後、晋州一進学校（慶尚北道）、東萊日進学校（釜山）、協成実業学校（ソウル）・光新産業学校（ソウル）などの校長を歴任し、創氏改名を最後まで拒否した教育者として知られている。金洛泳は1924年に黄海道載寧郡にある明新学校というミッションスクールの校長に就任、1929年には載寧夜学会も設立し、民族教育に力を注いだ。<sup>(42)</sup>

解放後に政治家となった明治学院卒業生もいる。白南薫は韓国民主党の創党幹部となり、1955年に民主党最高委員、1963年に新民党全党大会議長、1963年に民政党最高委員などを歴任した。朱耀翰は国会議員を経て張勉内閣の復興部長官、商工部長官をつとめ、金相敦（1925年神学部卒）は国会議員を経て第11代ソウル特別市長をつとめた。

彼らは、明治学院での学びと3・1独立運動の経験を経て、言論界や教育界そして政界へ進出し、それぞれの分野で重要な役割を果たしたのである。

その一方で、検討しなければならない難題がある。それは独立運動家

たちの転向と対日協力の問題である。15年戦争が始まると、朝鮮では神社参拝や学校での日本語の強制使用など、皇民化政策が徹底されるようになった。1939年には創氏改名が強制され、1943年には徴兵制がしかれた。民族主義者への弾圧も強化され、1936年から37年にかけて安昌浩、李光洙、朱耀翰、金東元（金東仁の兄）ら修養同友会の会員150名が一斉検挙された。厳しい取り調べと拷問の中で、皇民化政策の協力者への「転向」がおこなわれた。李光洙は1939年に朝鮮文人協会会長に就任し、1940年には「香山光郎」と創氏改名し皇民化政策に協力、朝鮮人学徒出陣の勧誘演説などもおこなった。朱耀翰も「松村紘一」と創氏改名し、1943年に朝鮮文人報国会支部会長となり、1945年には朝鮮言論報国会へ参加するなど、親日文筆活動をおこなった。金東仁も朝鮮文人報国会の幹事をつとめ、親日活動に参加した。李光洙、朱耀翰、金東仁の3名は「日本統治時代に親日活動を行なった人物」として『親日人名辞典』にも掲載され、韓国では糾弾の対象となっている。<sup>(43)</sup> 独立運動に献身した人物がなぜ対日協力者になったのか、その行為をどう分析し評価すべきなのか、今後の研究課題としたい。

<資料4>李光洙が起草した「2・8独立宣言」と「決議文」<sup>(44)</sup>

## 独立宣言書

全朝鮮青年独立団はわが二千万の朝鮮民族を代表し、正義と自由の勝利を得た世界万国の前にわが独立を期成せんことを宣言する。

四千三百年の長久の歴史を有するわが民族は、実に世界最古の文明民族の一つである。たとえ時には中国の正朔を奉じたことはあったとしても、これは朝鮮皇室と中国皇室との形式的な外交的關係に過ぎなかった。朝鮮は常にわが民族の朝鮮であり、かつて一度として統一国家であるこ

とが失われたり異民族の実質的支配を受けたりしたことはなかった。日本は、朝鮮が日本と唇齒の関係にあることを自覚していると言って、1895年日清戦争の結果、韓国の独立を率先して承認した。そしてイギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、ロシアなどの諸国も、独立を承認しただけではなく、これを保全することを約束した。韓国はその恩義を感じ、諸般の改革と国力の充実を鋭意図ったのである。当時ロシアの勢力が南下し、東洋の平和と韓国の安寧を脅かすと、日本は韓国と攻守同盟を締結して日露戦争を始めたが、東洋の平和と韓国の独立保全が実にこの同盟の主旨であった。韓国はいっそうその好誼を感じ、陸海軍の作戦上の援助はできなかったものの、主権の威厳までも犠牲にし、可能なあらゆる義務をつくして、東洋平和と韓国独立の二大目的を追求したのであった。ついに戦争が終結し、当時のアメリカ大統領ルーズベルト氏の仲裁により日露間で講和会議が開かれると、日本は同盟国である韓国の参加を許さず、日露両国代表間の任意によって日本の韓国に対する宗主権を議定した。日本は優越した兵力をもって、韓国の独立を保全するという旧約に違反し、暗弱であった当時の韓国皇帝とその政府を脅迫し欺いて、「国力が充実し独立が得られるときまで」という条件で韓国の外交権を奪い、これを日本の保護国とし、韓国が世界列国と直接交渉する道を断った。また「相当の時期まで」という条件で司法、警察権を奪い、さらには「徴兵令実施まで」という条件で軍隊を解散し、民間の武器を押収して、日本の軍隊と憲兵警察とを各地に配置した。甚だしくは、皇宮の警備までも日本の警察を用いるようになった。このようにして、ついに韓国を全く抵抗できない者にした後、多少は明哲であると言われていた韓国皇帝を放逐して皇太子を擁立、日本の走狗によっていわゆる合併内閣を組織し、ついに秘密と武力のうちに合併条約を締結した。ここにわが民族は建国以来半万年にして、自らを指導し援助すると言った友好国の軍国的野心の犠牲となったのである。

実に日本の韓国に対する行為は、詐欺と暴力から出たものであり、実にこのような偉大な詐欺の成功は、世界興亡史上に特筆すべき人類の大恥辱であると言える。

保護条約を締結する際に、皇帝と、賊臣を除いた数人の大臣はあらゆる反抗の手段を尽くし、その発表後も全国民は素手で可能な限りの反抗を行った。司法、警察権が奪われ、軍隊が解散した時も同様であった。合併に際しては、手中に寸鉄の武器を持たなかったにもかかわらず、可能な限りの反抗運動を尽くしたが、精鋭な日本の武器により犠牲となった者は数知れない。以後10年間、独立を回復しようという運動で犠牲となった者は数十万に達し、惨酷な憲兵政治下において、手足と口舌の自由を奪われながらも、未だかつて独立運動は絶えることがなかった。このことから見ても、日韓合併は朝鮮民族の意思ではないことがわかるであろう。このように、わが民族は日本軍国主義の野心の詐欺と暴力のもとに、わが民族の意思に反する運命におかれた。それゆえ、正義によって世界を改造するこの時に、その匡正を世界に求めることは当然の権利であり、また世界改造の主人公であるアメリカとイギリスは、保護と合併を率先して承認したという理由によって、今こそ過去の旧悪を贖う義務があると言える。

また合併以来の日本の統治政策を見ると、かの合併時の宣言に反して、わが民族の幸福と利益を無視し、征服者が被征服者に対するような古代の非人道的な政策を応用して、わが民族に参政権、集会結社の自由、言論出版の自由を許さず、甚だしくは信教の自由、企業の自由に至るまでも少なからず拘束している。行政、司法、警察等の諸機関が朝鮮民族の人権を侵害し、公的にも私的にもわが民族と日本人との間に優劣の差別を設け、日本人に比べて劣等の教育を施し、わが民族を永遠に日本人の使役者にさせようとしている。歴史を書き改め、わが民族の神聖な歴史的、民族的伝統と威厳を破壊し、陵辱している。少数の官吏を除くほか、

政府の諸機関と交通、通信、兵備などの諸機関の全部あるいは大部分に日本人のみを用い、わが民族には永遠に国家生活の智能と経験を得る機会を与えないようにしている。わが民族は、このような武断専制、不正不平等の政治のもとでは、決してその生存と発展を享受することができない。それだけではない。人口過剰の朝鮮に無制限の移民を奨励して補助を与え、土着のわが民族が海外に流離するのやむなきにさせた。国家の各機関はもちろん、私設の諸機関にまで日本人を用い、一方で朝鮮人の職業を失わせ、また一方では朝鮮人の富を日本に流出させた。商工業においても日本人には特殊な便益を与え、朝鮮人にはその産業的發展の機会を失わせた。このように、いかなる方面においても、わが民族と日本人との間の利害は互いに相反し、相反すればその害を受けるのはわが民族である。故に、わが民族は生存の権利のために独立を主張する。

最後に東洋平和の見地から見ても、かつて最大の脅威であったロシアはすでにその軍国主義の野心を放棄し、正義と自由と博愛を基礎とした新国家を建設しようとしており、中華民国もまた同様である。加えて、このたび国際連盟が実現すれば、再び軍国主義的侵略を敢行する強国は無くなるであろう。そうであれば、韓国を合併した最大の理由はすでに消滅している。そればかりでなく、もし朝鮮民族が無数の革命の乱を起こすとすれば、日本に合併された韓国はむしろ東洋平和を乱す禍根となるであろう。わが民族は正当な方法によってわが民族の自由を追求するが、もしこれが成功しなければ、わが民族は生存の権利のためにあらゆる自由な行動をとり、最後の一人に至るまで自由のために熱血をそそぐであろう。これがどうして東洋平和の禍根とならないであろうか。わが民族は一兵も持たない。わが民族は兵力で日本に抵抗する実力はない。しかし、もし日本がわが民族の正当な要求に応じなければ、わが民族は日本に対し永遠の血戦を宣布するであろう。

わが民族は高度の文化をもってからすでに久しく、半万年の間、国家

生活の経験を持つ者である。たとえ多年の専制政治の害毒と境遇の不幸がわが民族の今日を招いたのだとしても、正義と自由を基礎とした民主主義の上に、先進国の範に従って新国家を建設した後は、建国以来文化と正義と平和を愛護してきたわが民族は、必ずや世界の平和と人類の文化に対し貢献することであろう。

ここにわが民族は日本および世界各国が、わが民族に民族自決の機会を与えることを要求する。もし、そうならなければ、わが民族はその生存のために自由行動を取り、わが民族の独立を期成することを宣言する。

一九一九年二月八日

朝鮮青年独立団代表

崔八鏞 金度演 李光洙 金喆寿 白寛洙 尹昌錫 李琮根  
宋繼白 崔謹愚 金尚徳 徐椿

## 決 議 文

本団は、日韓合併がわが民族の自由意思によるものでなく、わが民族の生存と発展を脅かし、また東洋の平和を乱す原因となっているという理由により、独立を主張する。

本団は、日本の議会及び政府に対し、朝鮮民族大会を召集し、その会の決議をもってわが民族の運命を決定する機会を与えることを要求する。

本団は、万国平和会議において、民族自決主義をわが民族にも適用させることを請求する。右の目的を達するために、日本に駐在する各国大使公使に対し、本団の主義を各国政府に伝達することを要求し、同時に委員二名を万国平和会議に派遣する。右の委員は既に派遣したわが民族の委員と一致した行動を取る。

前項の要求が失敗したときには、わが民族は日本に対し永遠の血戦を

宣言する。これによって生ずる惨禍については、わが民族はその責任を負わない。

<資料5>文一平が起草した「哀願書」<sup>(45)</sup>

哀 願 書

朝鮮建国四千二百五十二年三月十二日 朝鮮民族代表 金百源 外十一名

去る三月一日朝鮮民族代表三十三名の朝鮮独立に対する宣言書は決して一個人の独断的片決より出でたるものにあらず実に全朝鮮民族の良心的要求なり。吾等はその後継者を以て二千万の要求二千万の主義を代表しその要求とその主義とを貫徹せんとす。吾等は昔日の朝鮮人にあらず世界の大勢を了解し文明の正道を円覚したる新朝鮮人なり。大勢は吾等を驅りこの要求の正大なるを保証し、文明は吾人を促しこの主義の光明なるを擔負す。故に朝鮮の独立は民族要求の正義人道にして大勢必然の公理天則なり。併合当初に在り世界に布告し朝鮮は武力実力なき故、他の外国の左右を受け東洋平和茲に攪乱する憂あるにより日本は朝鮮を併合し東洋平和を維持すると云いしも今日世界の大勢は武断的実力去り正義人道来りたるものにあらずや。既に圧迫的逆理去り平和的正道興りたりとせば今日吾等の独立宣言は何の矛盾あり何の背理あるか。東洋平和は朝鮮独立により益々確固たるにあらずや。之を隣邦支那に問い露国に問いました世界に問うも誰か逆理逆道なりと云うや。吾等のこの挙を輕挙妄動とすべからず。吾等の背後には実に二千万の思想的源泉あり。吾等の主義と要求を後継すべく吾等は寸鉄の武力に依らずして正義人道の大經大法を以て何時までもその目的を貫徹せんとす。

## 註

- (1) 朴殷植, 姜徳相訳『朝鮮独立運動の血史 1』平凡社, 1972年, 183頁。
- (2) 小野容照『朝鮮独立運動と東アジア』思文閣出版, 2013年, 124～125頁。
- (3) 姜徳相編『現代史資料26朝鮮Ⅱ』みすず書房, 1967年, 20頁。
- (4) 『未完の独立宣言』信教出版社, 2019年, 236～239頁。全文は資料4を参照。
- (5) 同書, 239～240頁。全文は資料4を参照。
- (6) 崔承萬『私の回顧録』仁荷大学校出版部, 1985年, 81頁。
- (7) 李光洙, 波田野節子訳『無情』平凡社, 2005年, 437頁。
- (8) 大韓民国文教部国史編纂委員会編『韓民族独立運動史資料集 11』1990年, 354～356頁。
- (9) 姜徳相「二・八宣言と東京留学生」『季刊三千里』17号, 1979年, 46頁。
- (10) 李光洙, 佐藤飛文訳「私の告白」『研究紀要』41号, 明治学院東村山高等学校, 2018年, 51頁。
- (11) 姜徳相『呂運亨評伝 1 朝鮮三・一独立運動』新幹社, 2002年, 116頁。
- (12) 李光洙「私の告白」50頁。なお宋継白は独立宣言書を学生帽の裏側に縫い込んだという説もある。
- (13) 天道教は朝鮮, 李朝末期の東学を継承した宗教。
- (14) 『韓民族独立運動史資料集 11』441頁。
- (15) 『現代史資料26朝鮮Ⅱ』21頁。
- (16) 李清一『在日大韓基督教会宣教 100年史 1908-2008』かんよう出版, 2015年, 48頁。
- (17) 姜徳相編『現代史資料26朝鮮Ⅱ』31頁。
- (18) 李光洙「私の告白」52～54頁。
- (19) 朴殷植, 前掲書, 138頁。
- (20) 国家報勲処編『海外の韓国独立運動資料Ⅶ中国編③』1993年, 42～43頁。
- (21) 白南薫, 佐藤飛文訳「私の一生」『明治学院歴史資料館資料集』第8集, 2011年, 105頁。

明治学院留学生たちの2・8独立宣言と3・1独立運動

- (22) 白南薫「私の一生」110頁。
- (23) 大石進「布施辰治の生涯と朝鮮」『布施辰治と朝鮮』高麗博物館, 22～23頁。
- (24) 白南薫「私の一生」111頁。
- (25) 『韓民族独立運動史資料集14』1991年, 411頁。
- (26) 同書, 414頁。
- (27) 『韓民族独立運動史資料集18』1994年, 518頁。
- (28) 『明治学院百五十年史 主題編』2014年, 263～264頁。
- (29) 黄海道誌編纂委員会編『黄海道誌』1982年, 214頁。
- (30) 朝鮮憲兵隊司令部編『朝鮮三・一独立騒擾事件』巖南堂書店, 1969年, 64頁。
- (31) 姜徳相編『現代史資料(25朝鮮一)』みすず書房, 1966年, 307頁。
- (32) 『黄海道誌』212頁。
- (33) 金九, 梶村秀樹訳『白凡逸志-金九自叙伝』平凡社, 1973年, 162頁。
- (34) 松禾郡誌編纂委員会編『松禾郡誌』1992年, 548頁。
- (35) 金東仁, 佐藤飛文訳「文壇十五年裏面史」『研究紀要』41号, 明治学院東村山高等学校, 2018年, 63頁。
- (36) 金成植, 金学鉉訳『抗日韓国学生運動史』高麗書林, 1974年, 63～64頁。
- (37) 『現代史資料(26朝鮮二)』みすず書房, 1967年, 29頁。なお金東仁は「文壇三十年の足跡」の中で「検束されたのは李達と私だけであった」と書いているが, 李達が逮捕されたのは2月11日なので, 金東仁が李達と崔在宇を間違えた可能性はある。
- (38) 金東仁「文壇十五年裏面史」65頁。
- (39) 金東仁, 佐藤飛文訳「文壇三十年の足跡」『明治学院歴史資料館資料集』第8集, 168頁。なお文中の寺内は初代朝鮮総督だった寺内正毅陸軍大将のこと。
- (40) 金東仁「答刑」大村益夫・長璋吉・三枝壽勝編訳『朝鮮短編小説選』岩波文庫, 1984年, 16～17頁。
- (41) 朱耀翰「二十世紀元年生まれ」『明治学院歴史資料館資料集』第8集, 122頁。
- (42) 載寧郡誌編纂委員会編『載寧郡誌』1999年, 141頁。

- (43) 親日人名辞典編纂委員会編『親日人名辞典』民族問題研究所, 2009年。
- (44) 在日本韓国 YMCA 訳『未完の独立宣言』236～240頁。
- (45) 『韓民族独立運動史資料集19』1994年, 534～535頁。